熊本地震④　～熊本赤十字病院支援～

熊本地震の発生により、熊本赤十字病院には、震災直後から患者が多数搬送され、軽傷から重症の患者の受け入れを行っていました。スタッフも被災者であるにも関わらず、家や家族のことを気にしながら病院に泊まり込み、24 時間、患者の治療・処置にあたっていました。

そのような状況の中、人員不足と体力の限界もあり、熊本赤十字病院長より医師・看護師の救援をお願いしたいと本社災害本部へ依頼がありました。本社の要請を受けて大阪赤十字病院をはじめ、全国の赤十字病院から熊本赤十字病院へ救援に入りました。

私たちは 4 月 20 日から 26 日までの 1 週間、全国の赤十字病院から集まった医師 16 名・看護師 25 名で熊本赤十字病院に入りました。ここでは、総合救命救急センターで看護師としてスタッフと同じように、日勤と夜勤を行いました。総合救命救急センターは ER（Emergency Room）型で、1 次から 3 次（風邪などの入院の必要がない症状から、特に高度な処置が必要な症状）の患者を受け入れています。私たちが現地に入った時には、震災直後のように患者が多数搬送されることはなく、日勤帯で救急搬送 20 台程度、夜勤帯で救急搬送 15 台程度でした。搬送患者は、屋根からの転落外傷が多く、外傷性硬膜下血腫や硬膜外血腫、頸椎損傷、骨盤骨折、大腿部頸部骨での搬送でした。また報道にもあったように、車中泊の影響でエコノミークラス症候群や肺塞栓、ストレスによる動悸や不整脈などの患者も搬送されていました。総合救命救急センターでは、外傷チームという、外傷の患者を専門に診察する医師チームがあり、急性硬膜下血腫で穿頭ドレナージや外傷の処置など、その場で緊急手術が出来るようになっていました。一方、1 次外来では、感冒症状や胃腸炎などの小児の患者も多く受診に訪れていました。

この様な多忙な中でも、熊本赤十字病院のスタッフは患者さんに優しく、そして支援に来ている私たちにも丁寧に指導し、気を遣ってくださいました。本来なら、支援に行った私たちが気を遣い、少しでも力になれるようにしなければならないのに、反対に優しさと温かさと元気をもらいました。帰り際に、師長さんやスタッフの皆さんから「院内も忙しい時に、本当に有難うございました。日赤で働いていて良かったと思いました」と言っていただきました。1 週間という短い時間でしたが、他病院で働いていくための柔軟性やチームワークの大切さを感じた 1 週間でした。全国から支援のために集まった医師・看護師 31 名は、今回の支援で初めて逢うスタッフでしたが、意思疎通がスムーズに出来、コミュニケーション能力の高いスタッフであり、このチーム力が日本赤十字社の強みだと感じました。

最後に、被災地の皆様の 1 日も早い復興をお祈りしています。